論文要旨

中国語における人称代名詞の非指示化と非現実ムード
―授与を表す構文を中心に―

小嶋 美由紀

本稿は、中国語における授与を表す構文を中心に、それと同一の構文スキーマを有する拡張構文について、その構文に含まれる非指示的な人称代名詞と非現実ムードの関係を考察したものである。本稿は主に、共通語における二重目的語構文、台湾閩南語及び東勢客家語における授与使役構文、共通語及び西北方言における受益構文を考察対象とする。これらの構文は全て、動作主（主語）が受け手に向けて、意図的にモノ或いは行為の影響を与えるという授与行為を表す。そして、それぞれの構文の拡張構文は、常に非現実（irrealis）の事態を叙述する文（非現実文）にのみ生起し、現実（realis）の事態を表す文（現実文）には生起しないというムード制約を持つ。

上述の 3 構文（二重目的語構文、授与使役構文、受益構文）の拡張は、更に 2 パターンに分けられる。その 1 つは、共通語の二重目的語構文や台湾ビン南語、東勢客家語などの授与使役構文に見られる拡張パターンで、モノや行為の受け手を表す三人称代名詞が、拡張過程で非指示化し、非現実文にのみ生起する構文になるというものである。このパターンの拡張構文が生起する非現実文の意味文脈は、話し手の意志表明を主としながらも、命令、誘いかけ、条件・仮定、義務、可能性・習慣など広く表すことができる。もう 1 つの拡張は、共通語や西北方言の受益構文に起こる拡張パターンであるが、拡張過程において行為の受け手（受益者）が一人称代名詞（共通語は一人称単数、西北方言は包括系）に限定されていき、非現実の意味文脈の中でも特に、発話内行為効力（illocutionary force）と関

わる領域に制限されるというものである（共通語では命令、西北方言では命令および意志表明）。本稿はこれら二つの拡張パターンを別々に考察し、その共通点と相違点も考察している。

本稿は 6 章から成る。以下に各章ごとの要点を記述する。

序章は主に中国語における現実・非現実の言語化の仕方について述べる。

第 2 章、第 3 章は、共通語における二重目的語構文［N1＋V＋N2＋N3 [NuCL＋N)]］（例:我给他一本书‘私は彼に一冊の本をあげる’）について、その典型構文と拡張構文［V ta ～］（ta＝非指示的な三人称代名詞、～＝数量表現）（例：睡他两三天‘二三日眠る’，玩儿他个痛快‘思い切り遊ぶ’）に共通する構文スキーマを提示し、その拡張過程を考察する。拡張過程においては、第 1 目的語 N2 の三人称代名詞が指示対象をなくし非指示化するという変化に伴って、その構文が現実文では用いられないというムード制約が起こる。そしてそれは、共起する動詞 V のタイプ（動作行為の影響を被る他者を必要とするか）や第 2 目的語“～”（何を指向するか）など他の文法要素と相関関係がある。典型的二重目的語構文が表す意味は、主に、N2 が受け手（recipient）である授与意（例：我给他一本书）と、被奪者である取得意（例：我抢了他一本书‘私は彼から一冊の本を奪った’）がある。本稿は、［V ta ～］構文への拡張を促進したのは、取得意よりもむしろ授与意であると主張する。なぜなら、授与行為は、主語（与え手）が、自身に所有権がある事物を移送させる行為であるということから、動作行為実現に対してもコントロールを持つということができ、このコントロールが、未実現の事態実現に向けた話し手の強い意志と深い関わりがあると考えるからである。しかし、授与意の典型的二重目的語構文が既然の事態を述べることができることからも明らかなように（例：我给了他一本书。‘私が彼に一冊の本を与えた’）、授与意がムード制約を生む唯一の条件ではない。もう一つの重要な条件は、N2、すなわち授与行為の受け手である三人称代名詞“他 ta”が非指示的であるということである。そのことは、N2 に置かれた三人称代名詞が指示的である場合は現実文にも生起できることからもわかる（例：昨天我打了他个落花流水‘昨日私は彼をこてんこてんに殴った’）。また、［V ta～］構文から非指示的な三人称代名詞“他 ta”を除いた構文も、現実文で用いることができる（我昨天玩儿了个痛快。‘昨日私は思い切り遊んだ’）。つまり、非指示的な三人称代名詞“他 ta”の有無もムード制約に大きく関わっていることを示している。［V ta～］構文が、話し手の強い意志を表すのは、話し手が、実在しない受け手を三人称代名詞で設定してまでも表したかった二重目的語構文の意味、すなわち授与意が有する主語の強いコントロールが際立つからである。

第 4 章は、台湾ビン南語や東勢客家語における授与使役構文［N1＋VP1＋GIVE＋N2＋VP2］、（例：“我買西瓜與伊食”‘私はスイカを買って彼に与えて食べさせようとする’）を考察対象とし、その拡張構文［V＋GIVE＋3SG＋AP］（例：台湾ビン南語“耍與伊歡喜”‘楽しく遊ぶ’）に共通するスキーマ及び拡張過程を考察する。当該構文の構文的意味において重要なのは、主語 N1 が VP1 による行為の影響を N2 に与えるという授与行為が介在していること

である。典型構文から拡張構文への拡張過程において、N2（VP1 による行為の影響の受け手）の三人称代名詞が非指示化するにつれ、構文が現実文に生起できないというムード制約が生じる現象が起こる。そしてそれには共起する VP2 の変化（動詞性述語から状態性述語へ）や VP1 の変化（動作行為による影響を被る他者の存在が有から無へ）など他の文法要素との相関関係がみられる。このように、授与使役構文の拡張も、第 2 章、第 3 章で考察した二重目的語構文の拡張同様、受け手 N2 の三人称代名詞の非指示化とスキーマ的意味が表す授与意が、拡張構文が有する非現実ムード性に関与していることが示唆される。

第 5 章は、共通語と西北方言（山西省、陝西省、内モンゴルの一部で話されている方言）の受益構文［N1 给 N2＋VP］における拡張を考察する。両言語の受益構文が表すスキーマ的意味は「N1 が N2 のために VP する」であり、拡張の結果、受益者 N2 が一人称代名詞に限定された命令文“你给我 VP”（例：你给我滚!‘出ていけ！’）になる 。西北方言では更に、N2 が包括系一人称複数“咱”に限定された命令文“你（给）咱 VP”（例：你（给）咱去。‘言ってきてくれる’）と意志表明文“我（给）咱 VP”（例：我（给）咱去。‘行ってくるね’）に拡張する現象も見られる。一人称単数を受益者に置いた命令文“你给我 VP”は、聞き手に対する非常に強い強制的な語気を伴うが、包括系一人称複数を受益者に置いた命令文“你（给）咱 VP”は命令の語気を和らげる効果を持つ。本稿では、このような語調の差は何に起因しているのかについても考察を行う。

第 6 章は、粤語（広東語）、上海語、共通語における三人称再述代名詞（resumptive pronoun）を含む文を考察している。これらは、授与行為を表す構文とは直接的な関わりはないが、指示性が弱い余剰的な三人称代名詞を含み、非現実文でのみ生起するというムード特徴と動作主の強い意志性（意図性）を有することから、第 2 章から第 4 章で考察してきた拡張的二重目的語構文［V ta～］、及び拡張的授与使役構文［V＋GIVE＋3SG＋AP］に共通するメカニズムを探る。そして、これら 3 種の構文に共通して含まれる非指示的な三人称代名詞は、動作行為の受け手を表す（もしくは受け直す）点で一致していることがわかる。潮州方言における非対格動詞を用いた受動構文に、非指示的な三人称代名詞が含まれる例がみられるが、これは動作主の意味役割を持つ。また、この構文にはムード制約もない。よって、非指示的な三人称代名詞の存在が非現実ムードと関わるのは、動作行為による影響の受け手の意味役割を有するときであると推測される。

拡張的二重目的語構文や拡張的授与使役構文のムード制約に関しては、これまで先行研究でも指摘されていたが、その要因に関する考察がなかった。本稿は、構文のスキーマ的意味が表す授与意と、拡張による受け手を表す三人称代名詞の非指示化というこの 2 点が、非現実ムード、特に話し手の強い意志表明に関与していることを示唆している点で独創的である。しかしなお、問題点も残されている。たとえば、授与を表す構文の拡張構文は、行為実現に対する話し手の強い意志を表すことが主たる機能であるといえるが、命令、誘いかけ、反実仮想、習慣など、意志表明以外の非現実を表す文脈にも用いられる。これらの意味文脈と、授与意が持つ強い意志性とはどう関わるのだろうか。

また本稿では、各章において中国語の構文拡張と類似した現象を有する他言語についても考察されている。例えば、第 2 章、第 3 章の二重目的語構文の拡張との関連では、英語の二重目的語構文（軽動詞構文）［give it a VN］（例: “I will give it a rest.”）、第 4 章の授与使役構文の拡張との関連ではタイ語の授与使役構文［N1＋VP1＋hâi＋N2＋VP2］、第 5 章の受益構文の拡張との関連では、日本語の受益構文「てやる」、「てくれる」文（例:絶対金持ちになってやる、出ていってくれ）などである。受け手を表す三人称代名詞の非指示化には言語差があるにしても、少なくとも上述の言語においては非現実文でのみ生起する構文への拡張が見られる。

今後は中国語における非現実ムード内の相互関係を浮き彫りにするとともに、類型論的な視点を取り入れ、授与を表す構文がその拡張過程でムード制約を帯びるようになる現象が、中国語特有のものなのか、地域的なものなのか、それとも系統的に異なる言語にも見られるのかについても追究していく。